

生徒の学習意欲を高める授業の工夫

—— 鲁迅「故郷」から ——

伊 藤 博

一、はじめに

現在私が勤務している公立中学校は、生徒指導上の問題も多く決して落ち着いた学習環境にあるとはいえない。生徒も全般に授業には消極的で、どの授業でも言われたことはやるが、常に受け身の姿勢が強い。板書をノートに写すことはするが、教師の発問に対し積極的に発言したり、他の生徒と意見を交換したりして、自分の読みを深めていくようなことは少ない。

今回取り上げた鲁迅の「故郷」は、問題行動を持つ生徒はもろんのこと、その他の生徒にとってもかなり難解な部類に入る教材であろう。ややもすると教師が注釈を加えて作品を解説し、主題は何かを探るだけの、活動の見られない授業になりかねない。当然のことながら、それでは意欲的な授業への取り組みは期待できない。そこで今回「故郷」を学習するにあたり、問題行動を持つ生徒も含めて、すべての生徒が意欲的に活動できる授業の工夫

はできないかと考えた。そしてさらに生徒の読みが一段と深まる方法はないかと探ってみた。以下簡単に実践報告をしたい。

二、実践報告

- ・実施 一九九二年九月
- ・対象学年 中三（男女）三クラス
- ・使用教科書 教育出版「中学国語3」

「故郷」鲁迅 作 竹内好 訳

(1) 授業のねらい

今回の授業にあたっては、どのクラスとも生徒が意欲的に学習に取り組めることを大きなねらいとしたが、「故郷」という作品を読むにあたり、次のことを指導目標とした。

〔価値目標〕

- ① 登場人物の人間像を通して、人間観を確かなものにする。
- ② 作品の展開に注意して読み、主題をとらえる。

〔技能目標〕

- ① 情景の描写の中に心情が反映されていることが理解できる。
- ② 人物の描写から、人物像を読み取ることができる。
- ③ 文章の主題をとらえ、それについて自分の考えを持つことができる。

この中でも特に今回の授業では、「技能目標」の②、③に関連したこととして、主人公の「わたし」・作者の言う「希望」について、より深く考えさせることに重点を置き、教師側のねらいとしてみた。従来の「故郷」の教材観や授業実践では、主人公の「わたし」が、ルントウとの間の「悲しむべき厚い壁」Ⅱ「自分の差」を意識し絶望する人間として扱われ、そのような悲劇をもたらした当時の中国社会の現実を考えさせようとするものが多かった。しかし、そこには「わたし」という人物に対する批判的な視点がほとんど存在していない。生徒の初発の感想にも、「なぜ『だんな様!』と言われて黙ってしまったのか」というものが見られるが、「わたし」は、ルントウとの再会の場面で、昔のような兄弟の関係を求めることもできたはずである。しかし、「わたし」はそれをしていない。自分の差を悲しんではいるが、その差を縮めようとか、なくそうとする努力は見られない。この他の言動にも、無意識のうちに自分とルントウとの自分の差を認めているところが見られる。つまり「わたし」は、ルントウとの自分の差に気付くことで悩むが、決して行動を起こしてはいない。単に「悲しむだけの人物」であるという点に気付かせたいと考えた。

また、「故郷」が各教科書においてどのような単元に所属しているかを調べると、その多くが「社会・歴史と人間との関係、人間像、人生のあり方を考える教材」となっており、「故郷」を現実変革の「希望の文学」として、いわば楽観的に位置付けているのである。これに対し、魯迅研究家の「故郷」への評価は、悲観的な解釈をしているものが多い。現実の問題として考えた時、作者のいうように「希望」は地上の道のように歩く人(Ⅱ望む人)が多くなればかなう」という単純な図式とまらないものがあるように思う。そこで、この授業では、作品を通じて語ろうとしている「希望」の実現が、実はそれほどやすいことではないことも考えさせたいと思った。

(2) 授業の進め方

学習指導計画(八時間)

- 1 全文を読み、感想・疑問点などを『感想メモ』プリントに記入し、提出する。(二時間)
- 2 場面分けと『感想メモ』集計プリント読み合せ(一時間)
- 3 学習課題解決のための《グループ学習》と討議(五時間)
- 4 まとめ(一時間)

「故郷」の授業に入る前に、生徒には事前学習として「漢字と語句」についてのプリントを配布し、最初の授業までに終わらせるよう指示しておいた。

第一時の全文通読後の『感想メモ』には、①一番印象に残った

人物、②一番印象に残った言葉、③読んで感じたこと、④読んで疑問に思ったこと、を書かせた。

第一時終了後、『感想メモ』の結果を項目別にプリントにまとめた。プリントには「感想」「疑問」を出した生徒の氏名をできる限り載せ、自分がこの授業に主体的に参加しているという実感を持たせるとともに、授業が進むにつれて自分の出した疑問が解明されてゆく喜びを味わわせ、より意欲的に授業に参加するよう工夫した。プリントは第二時に生徒に配布し、それぞれの場面でのどんな感想や疑問が出されているか、また、今後授業でどんな点を中心に考えてゆくかを確認した。特に、「④読んで疑問に思ったこと」については、教師側のねらいに沿ったものを中心に、場面ごとの設問としてまとめ、クラス全体の問題として考えることにした。ここでは『感想メモ』に多く書かれたものが、できる限り設問となるよう工夫した。設問は各場面とも五〜八个設定し、それぞれ短冊黒板に事前に記入しておいた。なお、生徒があげた疑問の中には、作者魯迅に関するものや「故郷」の舞台となった町、当時の中国社会に関するものなどが多く、学習上の助けとなるように、それらに関する参考資料をできる限りプリントして第二時に配布して解説をした。

第三時〜第七時は、場面ごとの設問を解決するためのグループ学習を行なった。設問の短冊は一つずつ提示し、すでに配布してあるプリントのどの箇所をふまえた設問かを説明してから学習を開始した。ここでは設問に対してグループで話し合い、意見を出しあう討論形式のものを取り入れた。これは、個人ではなかなか

挙手したり発言できにくい現状を考えてのことである。また、設問解決のためにはグループ内で自由に話し合えるというリラックスしたムードも大切にしたいと考えた。自分一人の考えだけでなく、グループで話し合う事によってさらに考えが深まるというメリットも重視した。さらに、学力の低い生徒や問題行動を持つ生徒も、グループ内の協力によっては十分に授業に参加しているという実感が持てることをねらいとしてみた。

なお、さらに学習意欲を高めるために、今回のグループ学習では各クラスとも、座席順に男女混合の四人一組で計十班を作り、班対抗の形式を取り入れた。各班には番号札を一本ずつ渡し、発言の際は代表が必ずその札を挙げることにした。また、正面黒板左端に模造紙大の「班別得点表」を作って毎時間掲示した。教師の発問に対する答えや、他の班の発表に対して意見を発表することとに班の得点とし、「班別得点表」の自分の班の欄にマグネットを一つずつ加え、どの班が現在何ポイントというのがわかるようにした。毎時間の終了後にその日の得点を集計し、授業がすべて終了した時点で総合得点を計算して各クラスとも上位三班を表彰した。

第八時は「故郷」に関するまとめの感想を書かせ、グループ学習の反省と感想も書かせた。簡単な教師によるまとめを行ない、最後に班対抗の結果発表と簡単な表彰も行なった。

(3) 主な授業記録

ここでは、特に教師側のねらいとしてあげた、先に述べた〔技

能目標」の②、③に関する授業記録を紹介することにする。

《第四場面に関して》

【設問3】なぜ、「わたし」はルントウに「だんな様！」と言わ
れて黙っていたのか。

つまり、なぜ主人公の「わたし」は、昔のような兄弟の関係を
ルントウに求めなかったのかという疑問である。この疑問をもと
にした設問には次のような意見が出された。

(一班) 何を言ってもいわからなかったから。

(三班) 昔のルントウではなくなってしまったので、とても悲し
かったから。

(二班) その次に返ってくるルントウの言葉を考えると、恐ろし
くて何も言えなくなったから。

(八班) ヤンおばさんに「あんた金持ちになったんでしょ。」
「知事さまになっても金持ちじゃない……。」と言われた
時もそうだったが、ここでも自分が「だんな様！」と呼ば
れて、自分がやはり支配する立場の側の人間であることに
気付いてしまったから。

八班の意見はかなり教師側のねらいに近い意見となった。この
ような発言には称賛の声が上がった。一つの班の発表を聞いた後
の発言には、必ず自分たちの独自性を出すようにと指示しておい
たため、かなり真剣に班ごとの話し合いが見られた。

《第五場面に關して》

【設問4】宏児や水生に代表される「若い世代」は、本当に「新
しい生活」を送れると思うか考えなさい。

(一班) 送れると思う。ただし、二人の努力次第だろう。

(四班) 世の中が変わらない限り無理だと思う。

(八班) これから引越す宏児にとって、水生と再会する機会は
皆無。したがって昔の「わたし」とルントウのようになっ
てしまうだろう。

(五班) 水生がルントウの息子なので、今後水生は現在のルント
ウのように育てられてしまうだろう。だから、水生が新し
い生活を送るのは絶対無理だと思う。

この他、否定的な意見が多く見られた。一班の「二人の努力次
第」は、「新しい生活」についてかなり明るい見方をしているが、
五班などはかなり厳しい見方をしている。この発問では、別の班
の意見を聞きながらさらに自分たちの意見を深めて発表しようと
する姿勢が見られた。

【設問5】地上の道のように、望む人が多くなれば「希望」は実
現すると思うか考えなさい。

(三班) あきらめないで希望を持ち続けることができれば実現す
るのでは。

(八班) 実現すると思う。希望を持つ人が多ければ必ず行動を起
こすのではないか。

(七班) ただ希望しているだけではだめだ。実行しなくては実現
しない。(同様の意見多数)

どの班の意見からも、生徒たちがすんなりと「希望」が実現するとは考えていないことがわかる。そこには困難が存在することを認めている。三班、八班に対する反論という形で他の班が意見を述べたことで、かなり白熱したムードとなった。生徒たちの考えが前述の楽観的な「希望」にとどまっていなかったところが良かった。

三、おわりに

授業後のアンケートを読むと、ほとんどの生徒が今回のグループ学習に対して次のような好意的な感想を書いている。

・自分一人では考えられなかったり、気付かなかったりした部分も、班の人と話し合うことで学ぶことができた。班全員の意見を一つにまとめ、班の意見として発表できたことも良かった。

・クラスみんなが積極的に授業に参加できて良かった。

・自分たちだけでなく、他の班の意見も聞けるので、問題に対する考えが深まり、視野が広がりとでも楽しかった。

たしかに今回の授業では自分たちが疑問としてあげた問題について考えていくことの他、グループの札と得点表によって競う「クイズ番組」まがいの興奮もあって、生徒はたいへんよく討論に参加した。前述の問題行動を持つ生徒は、授業に出席している時は札を挙げる担当となり、どの班よりも素早く札を挙げることに喜びを感じていた。そして親切な同じ班の生徒に助けられ（あらかじめこちらから依頼しておいたが）設問に対して真剣に考え、

意見を出している場面も見られた。

今回は同じ授業を三クラスで展開したが、クラスによって多少活発さの違いが出てしまった。構成メンバーの違いもあろうが、普段からの学級経営におけるグループ活動、話し合い活動への指導の大切さを強く感じた。

今回紹介した、第四・第五場面では、かなり白熱した発表の場となった。もう少し時間をかけてじっくり討論させたかったが、指導計画にそって進めたため、多少欲求不満となった生徒もいたようである。授業が終わり休み時間になっても、私のまわりに集まって、あれこれと議論している生徒が見られた。今までの授業では見られなかった光景である。嬉しい気持ちでいっぱいであった。設問の精選、評価の問題等、解決すべき課題は多々あるが、今後とも、生徒が生き生きと活動できる授業をめざしてゆきたいものである。

（川越市立大東中学校）